

シンポジウム質疑応答

座長 小倉紀美氏 (北海道立新得畜産試験場)

～ 放牧について ～

岡本： 放牧による効果を強調していたが、現実(帯畜大)的には全道で10%をきっており増加していない。しかしそれでも放牧が良いという理由は。

久保田： 今回調査を行った場所は環境が劣悪であり、平均気温5℃、凍結深度50cmで、草しか生えない。面積が50丁、その中で放牧は7割くらい。一時減少ぎみだったが舎飼いから放牧になってきており、今は増加している。良い方向へ行っているのが現状である。本当に放牧が良いのかというのは、酪農家たち自身が判断すべきである。集約放牧などの技術は真似できない。放牧農家の所得や方法はばらばらで、一つにするのは不可能である。私達の見解からすると、放牧により、牛を広いところに放してやると、ゆとりある経営ができ、牛が健康を取り戻せると思う。

落合： 自分の牛舎の周りにある程度の土地があると、放牧をしてもうまくいく。それではなぜ放牧が広がらないかということ、問題は経験のある人が少ないからではないか。放牧が全道で10%をきっているというのは少なすぎるが、道の統計がばらばらである。皆が放牧をやっていれば始める人が増えると思う。

久保田： 我々は放牧についての悪いところばかりが気になり、保守的である。悪いイメージを払拭するような良い報告が増えてくれば、やり始める人も増えてくるだろう。

松中： 北海道は放牧のイメージが強いので、道にとってはなくてはならないものだと思うが、なぜ踏み切れないかというのは、自分たちが怠慢だからとか、放牧でうまくいっている事例が事例だけで終わって

しまっているからだと思う。だから、こういう土地の環境ならこうした方が良いなどといった一般化する努力が必要である。具体的な成功例を分析、整理して、放牧に対するきっかけを作るべきである。

岡田： ここ20年間多くの人が放牧を断念している(根釧農試)る。集約放牧をしている人にさえ十分な技術や放牧ができるだけの環境の提供がされていない。頭数規模60頭以上の人に放牧技術の提供ができないと、果たす役割は小さい。大規模の中での技術提供をしていかなければならない。イギリスで大規模放牧ができてきているのは、農地が分散せず、労働力支援システムやコントラクターの環境が整っているからである。また、安定した社会システム、草地更新システムが成り立っているからである。小規模での技術をいかにして大規模に適應させていくかが課題である。

井沢： 大規模公共草地は粗放で低レベルの知識(平取町)しかない。それは組合や役場がやっており、ころころ変わる。そのためすぐに一からやり直しになってしまう。これらを何とかしてほしい。

～ コントラクターシステムについて ～

座長： コントラクターシステムは良いものなのか、コストは安いのか。

岡田： 安くはない。補助金なしで運営するのは無理である。しかし可能性はある。

座長： その条件としては何が考えられるか。

岡田： 時期的な生産なので限られたなかでいかに多くの面積を処理できるか、そのためには多くの機械や人材が必要になる。しかしそれらは他の時期には使用されない。

農家はコントラクターが効率的に作業できるように調整してやる必要がある。長期契約を結ぶとコントラクター側の投資を誘導する。後継者などが良質な労働力をコントラクター側に提供できる。

高木： (十勝農試) 今後の方向は可能性に富んでいる。コントラクター等の欠点の改善の余地はある。今は効率を優先するあまり、大量調製するために意識的に刈り取り時期をずらしているが、これは改善できる。

座長： マメ科の混播に対して、2番草の対応や扱い方はどう考えるか。

大下： (北農試) それは今年度の試験結果待ちだが、栽培面は専門外なのでよくわからない。私の考えでは、イネ科の単播だけで牛を飼っていくのは難しいと思う。牛が食べないものをいくら作っても無駄である。マメ科を維持していくのは重要だと思う。

井沢： 赤クローバーを維持することが一番大事だと思う。赤クローバーの維持はとても簡単である。なぜなら、2年生なので2年に1回結実するから、その種子を圃場にまけば必ず永続する。年に2回刈っても、どこかで結実させることを農家の人ができれば維持できるでしょう。ちゃんと結実させないと消えてしまうが、うまくやれば半永久的に永続できるかもしれない。

山口： (北農試) 赤クローバーは混播しなければ5、6年はもつ。しかし、チモシーと混播すると3年くらいで消えてしまう。これは競合や刈り取りで駄目になるからである。路傍の赤クローバーなら落下種子で更新するが、採草地ではやったことがない。イネ科とマメ科の割合を検討すべきである。

座長： 農地の集積システムなどの重要な問題について。

高木： それについては答えを持ち合わせていないが、コントラクター組織が各市町村に成立できる条件が整えば良いと思う。

座長： 種子が売れないことと、草地更新ができないこと。コントラクターも含めて更新できるかどうか。追播更新できるのか。

高木： コントラクターについては多様な発展を望む。草地更新を含めて、広がる可能性はある。更新面積が下がっていたり、種子の需給量が落ちているのは、コストをきり詰めているからだと思う。更新による弊害があるので全面更新しなくても多様な更新をして草地を大事に使う必要がある。

岡本： いったい何のための農業なのか。

岡田： 放牧が駄目というわけではない。放牧は完成度の高いシステムである。乳価が下がると放牧といえど多頭化が必要になる。どう農業を行うかは個々の考えで、本人の問題なので研究者が口を出すことではない。

～ 座長のまとめ ～

酪農の経営は多様であるということがよく分かった。大規模経営では、多頭化や労働力の問題があるためコントラクターに頼るとか、共同で飼育するといったことを意識しなければならない。小規模経営は小回りがきくが、大規模の場合は技術のあり方や対応を考えるべきである。トウモロコシなどのエネルギー価の高い飼料は問題が多いが活用しなければならない。